マイスイート
チビール
筑摩十幸
表紙／りゅうき夕海
二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS
試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『マイスイートデビィル』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

マイスイート
チビッル
筑摩十幸
表紙／りゅうき夕海
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

九條(くじょう) 奈月(なつき)

家を空けがちな退魔師の両親にかわって、家事をこなすしっかり者の少女。母親から渡されたロザリオを使い、エンジェルナツキに変身。レイと戦うことに。

九條(くじょう) 玲(れい)

身体に悪魔の力を封印され美た少年。デビィルレイに変身するが、しかし本人にはそのその間の記憶はない。普段は無邪気に姉に甘えて、奈月をドギマギさせることも。

「おい、あれなんだ？」
「なんか、飛んでいるわね」
放課後、幸徳学園の校庭で部活に汗を流していた生徒たちは、次々に上空を指さし始めた。驚いたことに、青く晴れ渡った空に人型の影が浮かんでいる。
そしてソレは見る見る校舎に近づいてきて、時計塔の三角屋根の上にひらりと舞い降りた。
「誰だ、あれ？」
「子供みたいだけど……変わった格好ね」
まだ校内に残っていた多くの生徒たちの視線が、謎の人物に注がれた。
その姿は異様の一言に尽きる。上半身はノースリーブの黒タンクトップ。裾が短くヘソだしである。下半身はスパッツのようなパンツスタイルでやはり黒。
頭には二つの頂点を持つとんがり帽子、背中には蝙蝠のような小さな羽がパタパタ羽ばたいている。手には大きいフォークみたいなモノが握られ、さらにお尻には矢印形の尻尾まで生えていた。
まるで漫画に出てくる悪魔そのもの、なのだが……小学生くらいに小柄で華奢なその姿は、『バイキンクン』といったほうが似合いそう。
「なになに？　テレビの撮影？」

「やーん、なにあれ。かわいい～！」
女生徒たちが興味を持ったらしく、時計台の周りに徐々に集まり始めた。
「ククク……ハ――――ッ、ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！」
熱い視線を浴びながら豪快に笑う。その声はやはりどこか幼い感じのする男の子のものだった。
「僕の名前はデビィルレイ。今よりこの学園を支配する！　抵抗する者には容赦しないぞ」
バッと突き出した掌からオレンジ色の光球が放たれる。
それは高速で飛翔して校庭の隅のイチョウの木に激突した。
ドッカアァァァァンン!!
大音響とともにイチョウの木が燃え上がる。
「おおースゲエ」
「なんの手品だよ」
「なに言っているのよ魔法よ、魔法。すっごーい」
生徒たちは大盛り上がりでヤンヤと歓声を上げる。
「フッ、こんな愚かな奴らを支配するのは簡単なことだ」
不敵に笑って前髪をかき上げる美少年。そんな背伸びしたような生意気な姿も女生徒たちの心をガッシリつかんだようだ。

「かわいいよ、あの子、超かわいいぃぃ！」
「待ち受けにしちゃおうっと」
女生徒たちがさらに騒ぎ始め、あちこちで携帯のカメラがパシャパシャと瞬いた。
「むむ、勝手に撮るなよッ」
しかしそれがカンに障ったのか、小悪魔少年は巨大フォークを女生徒たちに向けて突き出す。
ビビビビッッ！
そこから謎の怪光線が放たれ、女生徒の携帯が次々に破壊されていく。
「ああ～ん、ケータイ、壊れちゃった～」
「でもカワイイから許しちゃう」
傍若無人の振る舞いにも人気はまったく落ちないようだ。
「まったく、人の話を聞くときは携帯の電源を切らないとダメですよッ！」
デビィルレイが怒ったようにほっぺたを膨らませる。そんな幼げな仕草も彼にはよく似合っていた。
「なんか悪魔のくせにまともなこと言っているな」
「そこがいいんじゃない」
「きっと真面目な悪魔なのよ」

ワイワイと生徒たちが騒いでいると、
「そこまでよ、この悪魔！」
突然少女の声が校庭に響き渡った。
「おおっ、今度はなんだ⁉」
声がした体育館の屋根のほうに生徒たちの視線が集まり、そこに一人の少女の姿を見つける。
薄手の純白ローブドレス、頭上に輝く黄金のリング、羽根飾りのついた短めのブーツ。そして背中には眩しいほどの白さを持つ二枚の翼。
「天使だ。天使が現れたぞ」
生徒の言葉通り、可憐な天使の姿をした少女が凛と屹立していた。
「後から後から、今日はどうなってんだ。コスプレ大会か」
「でもすげえ、かわいいぞ」
男子生徒の視線が驚きから次第に熱を帯び始める。天使少女はそれだけ魅力的だった。
翼を生やした背中で、艶やかなブロンドが風を受けて優雅にたなびく。
悪魔少年を睨む瞳は切れ長の碧眼。悪魔を憎む激しい感情のせいだろうか、柔らかそうな頬が僅かに紅潮し桜の花びらのような唇もきつく結ばれている。そんな気の強そうな表情も男心をギュッとつかむチャームポイントだ。

ローブは生地が薄いので、少女天使のボディラインは遠目にもハッキリわかる。
胸の膨らみは勢いよくローブを持ち上げて、大きく開いた腋の開口部から横乳のほの白い肌がチラリとのぞいており、かなりのボリュームがありそうだ。
深くくびれたウエストに巻きつくベルトの位置からすると、相当腰の位置も高いようだ。
その期待通り、短めの裾から伸びる生脚は驚くほど長い。太腿とふくらはぎの健康的な筋肉をしっとり女らしい脂肪の層が包み込み、極上の脚線を描き出している。
清楚で可憐でありながら、同時に猛々しいばかりの強さも兼ね備えている。まさに、誰もが無意識に共有する闘いの女神を具現させたような美しい天使の姿だった。
「メチャクチャかわいい。芸能人かな」
「ふん、なによあの格好、露出多すぎ」
「そこがいいんじゃないか。ねえ、名前なんていうの？」
男子生徒の声援を背中に受けて、天使の少女は恥ずかしそうだ。
「僕も興味あるな。名前を聞かせてもらおうかな」
「……」
デビィルレイの問いかけにも、天使はすぐに答えなかった。というより、今考えている風だった。
「わ、私は……えーと、エンジェル……エ、エンジェル……ナツキよっ！」

言い終わると男子生徒から「ナツキちゃーん」などと恥ずかしい声援が飛び、ナツキの顔面は見る見る真っ赤に灼けていく。
「エンジェルナツキか。名前からすると僕の敵みたいだね」
にっと笑うデビィルレイ。唇の端に小さな牙が鋭く光った。
「いくぞっ！　エンジェル！」
次の瞬間、黒翼をはためかせ猛然とダッシュする。
ドガガガッッ！
目にもとまらぬ高速のフォーク突きがエンジェルナツキを襲うが、天使の細腕はことごとくそれらを弾いてみせた。
「がんばれー！　ナツキちゃん！」
「負けるな、レイ君！」
闘いの激しさに呼応するように、双方の声援も大きくなっていく。
「てえぇぇいいいっ！　デビィルトライデントォッ！」
フォークの先端が巨大化して、さらにグンッと伸びた。今度ばかりはかわしきれないと思われたが、
「ちぃっ！　えんじぇるせいばーっ！」
ガッキィィィンンッ！

ナツキの右手に光の剣が出現し、悪魔の猛攻を見事食い止めた。
「なかなかやるね。それにしても随分刺激的な格好だなあ」
ギリギリとつばぜりあいしながらレイがニヤリと笑みを浮かべる。いやらしい視線がローブの大きく開いた胸元に注がれている。
「だだだ、誰のせいでこんな格好していると思っているのよ！」
「しらないよ。ナツキの趣味でしょ、こんな風に恥ずかしい格好するのは」
意地悪く笑ったレイのお尻から悪魔尻尾がヒュンッと伸びる。そしてエンジェルの短めのスカートを捲り上げた。
「きゃあっ！」
両手がふさがっているため隠すこともできず、プリプリのお尻が丸出しにされてしまった。雪白の尻タブを覆う布地はなく、ワレメに沿って細い紐が縦に走っているだけ。
「おおっ、Tバック……いや、ふ、褌か」
「ほとんど丸見えじゃねえか」
そうエンジェルナツキの股間にはパンティは存在せず、褌状の縦布が覆っているだけなのだ。当然フロントも超が三つくらいつくハイレグ状態。そこに生徒たちの視線が一斉に集中する。
「いやああぁぁぁぁっっ！　なにすんのよぉぉっっ！」

羞恥心がエンジェルの中に眠っていたパワーを呼び覚ましたのか、ナツキは狂ったようにせいばーを振り回した。
それが偶然デビィルレイの股間をかすめ、スパッツが縦に真っ二つに切り裂かれた。
「うわっ！」
「キャアッ！　レイ君、カワイイ～」
下半身を剥き出しにされ真っ赤になる悪魔少年。それを見て女生徒たちが一斉に黄色い悲鳴を上げ、校庭は蜂の巣をつついたような騒ぎになった。
「あ、あ……」
ソレをもっとも至近距離で見てしまったエンジェルが頭から湯気が出るほど真っ赤になる。
まだ皮を被ってる愛らしい男の子のオチンチンがそこにあった。
（でも……年齢的にまるっきり子供というわけではないから……もし……もしも……アレしたなら……皮も剥けるはず……こういうの、確か……仮性包茎っていうのよね……）
そこまで考えてナツキはハッと我に返る。
思わずマジマジと見つめてしまい、さらには分析までしてしまった自分が恥ずかしくてならない。
「なんてモノ見せてんのよ！　このヘンタイッ！」

バッチィィィンンンンッッ!!!
ビンタ一閃。瞬間的に音速を凌駕した振り抜きが悪魔少年の顔面をまともに捉える。
「ぎゃああぁぁん。お、おぼえてろぉぉ〜！」
デビィルレイの身体はフリチンのまま独楽のように回転し、青空に吸い込まれていった。
「や〜ん、やられちゃった」
「レイ君になにすんのよぉ」
「なによ。私が悪いって言うの！」
女生徒たちから非難を浴びて、ナツキは鬼の形相でギロッと睨み返した。
「いやいや、ナツキちゃんは悪くないぞー」
「ざまあ、悪は滅びるんだ」
「いいぞ、ナツキちゃん。カッコイイよ！」
今度は男子生徒が反撃の声援を飛ばす。
「うう……やってらんないっ」
学園の喧噪に僅かに顔をしかめて、エンジェルナツキもその姿を消し去った。

トントントントン。
包丁がまな板の上でスキップを踏むと、タマネギのスライスがあっという間に出来上が

る。

「よっ」

それを先に炒めておいた肉と一緒にフライパンに放り込む。ジャッと音がして香ばしい香りが匂い立つ。

鮮やかな手際でカレーをこしらえていくのは九條奈月だ。

黒曜石のように輝く瞳と濃いめの眉は、利発そうな印象を与え、艶やかな黒髪をまとめたポニーテールがさらにそうした魅力を引き立てている。

身体全体から野ウサギのような躍動感と愛らしさが漂い、それは料理をする動作の一つ一つにも現れて、手際にまったく無駄がない。

制服の上にエプロンを重ねているが、スタイルのよさは隠せない。特にプリーツスカートから伸びた脚は早熟な大人の魅力すら匂わせる。

「ただいま、お姉ちゃん」

「おかえり、玲。今日は玲の好きなカレーだからね」

キッチンに入ってきた学生服の少年のほうを振り向いて奈月はギョッとする。

「あ、あれ……なに？　その絆創膏」

「んーよくわからないんだ。気がついたら学校の中庭に倒れてて、痣ができていたんだよ」

「ちょっと見せて」

少し焦った様子で絆創膏を捲る。そこには真っ赤な手形が残っていた。
「うわぁっ！」
「どうかしたの？　腫れてる？」
「え、あ……えーと、大丈夫みたいね。うん、虫にでも刺されたんじゃないかな」
取り繕うように言いながら絆創膏を元に戻した。
「じゃあ、僕宿題するから」
「うん、晩ご飯できたら呼ぶね」
階段を登っていく弟を見送って奈月は溜め息をついた。
両親が海外出張のため、奈月は一週間前から弟の玲と二人暮らしをしている。
両親はなんでも有名な『タイマシ』らしいのだが、奈月にとってはちんぷんかんぷん、占い師の一種くらいにしか思っていない。
そのタイマシの仕事は海外からもオファーが盛んにあるようだった。
出張自体珍しいことではなく、小学生の頃から一通りの家事をこなせるようになっている奈月にとって、さほど苦痛ではない。
両親もしっかり者の姉を全面的に信頼しているようで、今回は一ヶ月近い長期出張だ。
奈月もむしろ口うるさい両親がいないぶん、気が楽だと言えた。ただ一つのことを除いては……。

濃霧に包まれたように混濁した意識に、弟の声がやけにはっきりと響く。

「やらないとまた……」

蛇口の取っ手をツンツンとつつかれ、ナツキは「ああ」と諦念の吐息を漏らした。

(あれだけ恥を掻いたじゃない……いまさら取り繕っても無駄……それに弟には、正体ばれてないんだし……一時の我慢よ)

それは自己欺瞞だったのかもしれない。半ば自棄的な気分に支配された指が下穿きに向かって伸びていく。

おへその下、蝶結びにされた細紐を親指と人差し指で挟む。

悪魔のいかなる攻撃も跳ね返した聖なる力も、少女自らの衝動には効果がない。

(私……本当に……脱いじゃうの……学校で……? みんなや弟が見てるのに……?)

(仕方ないの……今だけ……今だけ……)

(本当は見てもらいたいんじゃない?)

「ハアハア……ああ……」

混乱したまま指先だけが、正確に動き続けた。まったく普通の下着のように、スルリと腰紐がほどける。

「おおおお、本当に脱ぐぞ!」

「いいぞナツキちゃん、どアップで撮って上げるからね!」

(一つの話し読み)
ここから
スタート!

いくつもの視線とカメラレンズが、決定的瞬間を逃すまいと一斉に聖少女の股間に向けられた。

その中でもレイの視線は一際強く感じられる。

（あぁ……玲に……そんな目で見られたら……も、もう……私……おかしくなっちゃうっ！）

ついに完全に紐がほどかれ、オシッコと汗でぐちょぐちょに濡れた褌がベチャリと地面に落ちる。

「おおおおおっ！」

「す、すげぇ‼」

ついに暴かれた少女天使の聖域は、天使に相応しい清冽さを持ちつつも、生々しいまでの色気も兼ね備えていた。

新鮮な果実を思わせるピンクの花唇が、左右綺麗に並んでいる。中心部は僅かにほころび、濡れた粘膜を晒していた。オシッコにしては妙にぬめりのある粘液を宿したクレヴァスからは、甘酸っぱい処女の芳香が匂い立ってくる。

「きゃあ、すごいすごい！」

「本当に脱いじゃった！　丸見えじゃない」

生徒たちが大騒ぎし、

パシャッ！　パシャッ！　パシャッ！　パシャッ！　パシャッ！　パシャッ！

目映ゆいほどのストロボが光のシャワーを浴びせてくる。

「ふ……ぁ……あ……」

閃光はそのまま網膜を灼き、脳裏を焦がす。真っ黒になった視界の中、光の粒が上から下にもの凄い速さで流れていった。

（うぁ……撮られてる……翔んでる……私……もう、わけがわかんないよ……）

フラッシュを媚粘膜に浴びるたびにゾクッゾクッと背筋が震えた。

「露出の快感が理解できたって顔だね」

「え……ち……ちがう……私はそんな女じゃ……」

「もっと見せてよ、中まで」

「！」

反論を遮って突きつけられる命令。年下の男の子にいいように弄ばれ、ナツキは惨めさに唇を噛む。

「うう……中……まで……ハアハア……ああン」

逆らえない状況だと自分に言い聞かせ、ナツキの中指と人差し指が両側から秘唇を押さえた。

昂奮と緊張と羞恥で釣りそうな指に、思いきって力を込める。

クチュッと音がして、花びらが大きく広がった。鴇色の真珠も、オシッコの孔も、処女の膣孔も、そしてお尻の穴までもが、陽光の下、完全に暴かれてしまった。

（ああ、見られちゃってる……恥ずかしい私の全部が……）

さっきを遙かに超える衝撃が身体の中心にズシーンと食い込んだ。

まるで視線に犯されているみたいで、処女の媚孔が火を点けられたように熱くなった。

（弟も……ああ……玲にも……奥の奥まで……見られちゃったんだ……）

背徳感がいっそう昂奮を高めるのだろうか。弟の視線を感じるだけで子宮がカアッと熱くなり、天使の秘肉は禁忌（タブー）の潤いを湧かせてしまう。

「すごい、なんて綺麗なんだ……」

「なんなの……こ、この娘頭がおかしいんじゃないの⁉」

今度は迫力に圧倒されたのか、唸るような声が上がる。男子も女子もナツキの媚肉に見とれてしまい、撮影も忘れて食い入るように見つめていた。

「フフフ、素直なナツキにはご褒美をあげないとね」

デビィルレイがナツキの顔の横に移動する。黒タイツのフロントが開いて、初々しくも激しく勃起したペニスが姿を現す。

色素沈着もほとんどなく、サイズもまだまだ大人とは言い難い大きさだ。剥けかけの包皮からチェリーピンクの亀頭が半分頭をのぞかせているのも、愛らしい雰囲気を高めてい

る。
「舐めるんだよ、エンジェル」
「！」
露出の快感に酔わされ、うっとりと蕩けていた表情が一転して強ばる。
（そんな……そんな……お、弟のオチンチンを……!?）
想像しただけで背徳感が爆発的に膨らみ、頭がカッと熱くなる。
（そんなこと……許されるわけない……絶対できない！）
金髪を波打たせブルブルと顔を振るナツキ。瞼も硬く閉じて、弟の勃起から必死に目を逸らす。
「いやだなんて言わせないよ、エンジェル」
ガシッと金髪をつかんで頭を固定する。
「僕がその気になれば学園ごと吹き飛ばすことだってできるんだよ」
耳元で囁き、残忍な微笑みを浮かべる。さらに悪魔の蛇口にも手を伸ばす。
「ああ……わ、わかった……言うとおりにするから……！」
にっちもさっちもいかない状況に追い込まれ、ナツキは震える唇を広げた。
「舌を出して、舐めるんだ」
「ううう……」

背徳と屈辱を胸の奥深くに飲み下しながら、ナツキは舌先を亀頭部に這わせていく。
もちろんフェラチオなど未経験のナツキだ。どうすればいいのかわからないまま、闇雲に舌を動かした。
舌に染み込む塩苦い味や、鼻腔をくすぐる弟の牡臭が、姉に罪悪感を植えつけてくる。
「ン……ンンッ……くちゅ……ちゅぷん……」
(私……弟のオチンチンを……舐めさせられてる……)
近親相姦の罪を犯している自分を意識するだけで、胸が張り裂け、気が狂いそうだ。まさに細胞レベル、本能に直結する生理的な嫌悪感をこらえるのは、並大抵のことではない。
ペニスが口腔粘膜や舌の腹に触れるたびに、嘔吐感が食道を灼き、冷たい脂汗が全身から噴き出してきた。
「天使のナツキちゃんが、悪魔のチンポを舐めてるぞ」
「ナツキちゃんはショタコンだったのか」
「誰のモノでもくわえ込む淫乱なのよ」
周囲から蔑むような声が聞こえてきて、ナツキはイヤイヤと首を振る。
(ああ、見られてる……私が……弟のオチンチンをしゃぶっているところ……みんなに見られてる……)
近親相姦の罪を犯しながらそれを生徒たちに見せ物にされる。絶望的な状況に追い込ま

れ、ナツキの心はかき乱される。
「フフフ。もっと激しくいくよ」
ブロンドを鷲づかみにし、レイは腰をグイグイと前後に振る。
「んむぐっ！　ふむぅ！　ぁんんんっ！」
若竿が抜き差しされ、喉奥まで弟の勃起に犯される。その勢いで包皮が完全に剥け、口中に青い精臭が溶け拡がった。
（んああ……オ、オチンチンの匂いが……）
脳幹にまで突き抜ける刺激が少女の理性を磨り潰す。
息苦しさと相まって、次第になにも考えられなくなっていく。
「すごい、天使の唇って、こんなに気持ちいいんだ……ああ……吸い込まれそうだよ……う、うう……」
快感に声を震わせながら、レイが腰をブルブルッと震わせた。その直後
ビュクッ！　ドプドプドプッ！
「んむぐぅぅっっ！」
ペニスが激しくいななき、唐突に夥しい精を解き放った。
（い、いやぁ――――――ッ！）
激しすぎる嫌悪に顔を引き起こし、強引に勃起を吐き出すナツキ。苦しそうに喘ぐ唇か

ら、撃ち込まれたばかりの精液がドロドロと流れ出る。
「ナツキちゃん、口に出されて苦しそうだな」
「馬鹿ね、悦んでいるのよ」
「ハアハア……んく……っ」
（うう……変な味……き、気持ち悪いよ……）
惨めさに泣き出したい心境だったが、デビィルの責めはまだ終わる気配を見せない。
射精した直後にもかかわらず、まったく勃起は衰えていないのだ。
さらに精液を口唇に受けてしまったナツキを、深刻な事態が襲っていた。悪魔の精液は強力な催淫効果を持っている。
それまでと比較にならない淫欲を植えつけられ、ナツキの眼は弟の勃起に釘付けとなった。
「ジッと見つめて……そんなに僕のオチンチンが気に入った？」
「そ、そんなこと……ないわ」
反論の声も自信なさげで、どこかか細かった。
「ふーん、まだ頑張るんだ……ン？」
そのときレイの視線がナツキの胸元に注がれる。
「？」

ナツキもその視線を辿り、すぐにギョッと見開かれた。
美乳の谷間にあったロザリオがずれて、ハートの痣が露わになっていたのだ。
「なるほど……ね」
レイがなにかを確信したように嗤った。これまでにないほど凶暴な光が双眸に宿る。
（ば……ばれた……）
最悪の事態にナツキの顔は見る見る青ざめる。二人が実の姉弟だとばれてしまった以上、悪魔はそこを責めてくるに違いない。
「もう一度舐めてもらうよ、ナツキ」
勢いの衰えない勃起を再びエンジェルの唇に押し込む。
「もう、やめ……んっくぅ……いやあ……むぅぅっ！」
「そりゃあ、イヤだろうね。ククク」
なにかを確信した言い方だった。天使の最大の弱点を握ったのだという自信だろう。
「むぐぐ……ヒや……んむ……くちゅ……」
（こ、このまま……私……堕天使にされちゃうの……？）
敗北の予感が冷たい氷のように心臓に食い込んできて、ゾクッと悪寒を感じた。
その一方で、不思議な高揚感がお腹の底からこみ上げてくる。一度は治まりかけていた動悸も再び最高潮に達していた。

（どうして……弟のオチンチン……舐めさせられて……どうしてこんな気持ちになっちゃうの……？）

それは悪魔の精による催淫効果が、内側から少女天使を蝕んでいるためなのだが、ナツキが知る由がない。

「ほらほら、もっと舌を動かしてよ。僕のこと……『レイ』のことが好きなんでしょ？」

白濁の残滓が粘る口腔をクチュクチュと掻き混ぜながら悪魔少年が迫る。

「ハアッハアッ……あ、あむ……そんな風に……ン、くちゅ……言わないで……んふぅ」

（私……最低だ……ごめんね、玲……お姉ちゃん失格だよ……）

その罪の意識が催淫効果と相まって被虐願望をくすぐってくる。

（ごめんね……玲……こんなお姉ちゃんを許して……）

いつしか唇が積極的に動き始め、実弟のペニスを根本まで呑み込んでいく。それが自分に与えられた罰であるかのように。

「どうやら、その気になってきたかな」

しめたとばかりほくそ笑む。

姉弟の愛情を利用した責めにより、ナツキは自らに相姦願望があるのではないかと思い込み始めていた。

それが自己暗示となって聖少女の理性を麻痺させ、悪魔少年の思惑通り、ナツキを深遠

な近親マゾヒズムの淵へと引きずり込んでいく。
「子供っぽいチンポをうまそうに舐めてるぞ」
周囲から蔑むような声が聞こえてきて、ナツキはイヤイヤと首を振る。それでも唇は、吸いついたように勃起から離れない。
（ああ、見られてる……私が……弟のオチンチンを、おしゃぶりしているところ……みんなに見られてる……）
絶望がいっそう被虐の快感を高め、ナツキは異常なほどの昂奮状態に追い込まれていく。
「ナツキは今何をしているのかな？」
唇への抽送を繰り返しながらレイが訊いた。
「うう……舐めて……ンンぅ……います」
「もっと具体的にお願いするよ」
レイの指が胸の痣をグリッと突く。
「ヒッ！」
ナツキにはそれがみんなの前で正体をばらしてしまうぞという脅迫に感じられた。
「ハアハア……私は……アン……ナツキは……レ、レイ……の……うぅ……オ……オ……オチンチンを……ちゅぱっ……舐め舐めして……いましゅ……んふぅ」
「それでどんな気分なの？」

「ぁうう……と、とても……クチュ……昂奮しています……あふっ」
「だからオマ〇コが濡れているんだね」
「あぁっ！　いやん！」
レイの指摘通り、フェラチオを始めてからナツキのクレヴァスは新たな蜜をジクジクと湧かせていた。
左右の陰唇も開ききって、淫らな花が満開である。
「続けて言ってみて」
「ナツキは……あはぅ……レイの……オ、オチンチンを……ンフッ……舐め舐めして……クチュン……とても……ああ……昂奮して……オ……オマ〇コを濡らして……います……ああぁっ！」
奈月にとっては近親相姦の告白のような台詞だ。言わされただけでも、心のダメージは相当大きい。
「おお……なんていやらしいんだ」
「あれで天使なんて笑っちゃうわ」
破廉恥すぎる告白に周囲からもヤジが飛んだ。
（ああ……もう……頭がおかしくなっちゃう）
極限の恥辱を味わわされ、ナツキの自我は崩壊寸前だ。

「ンン……ああ……あふっ……レイの……オ、オチンチン……すごい……おいしい……はぁあん……」

片手で竿をしごきながら、もう片手は自らの秘園を責め立て始める。

「おいおい、オナニーまで始めたぞ」

「ナツキちゃんって、本当にエッチだったんだなぁ」

パシャ、パシャ、パシャッ！

生徒たちも昂奮した様子で天使少女のオナニーを鑑賞し、シャッターを切りまくった。

「あ、ああ～～～～ん!!」

官能の炎に油を注がれ、ナツキは生々しい牝の声を漏らしてしまう。もう身体が疼いてどうにもならない。

指先はクリトリスを擦り続けているが、それだけでは煮えたぎるマグマのような情感を鎮めることはできなかった。

（アソコが……お腹が、疼いてるよぉ……あぁぅ……切ないよ……ど、どうすれば……いいの……）

処女孔が物欲しげにヒクつくたび、熱い蜜液がお腹の奥から溢れ出てくる。お尻のほうまで濡らしてしまい、可憐なアヌスは朝露に濡れた蕾の風情だ。

「んあ……くちゅ……オ、オチンチン……んむぅン……ジュブッ……レイの……オチンチ

ン……」

陶然とした表情で呟きながら、ナツキは弟の肉棒に奉仕を続ける。裏筋や鈴口の周辺に丁寧に舌を這わせ、時折強く吸引もする。

背徳の悦びを徐々に教え込まれ、碧眼は蕩けて、焦点を失いつつあった。

「すっかり発情したようだね。天使といってもその正体は淫乱な牝犬だったみたいだ」

ナツキの様子を見てデビィルレイはニヤニヤ嗤う。

背徳感をミックスされた魔性のペニスの効果は絶大で、フェラチオだけでナツキは極限まで発情させられてしまっていた。

「このままトドメを刺せば、完全に堕ちるな」

シナリオ通りの展開にほくそ笑みながら、桜色の唇から勃起を引き抜く。

唾液の糸を引くペニスは、さっきより逞しさを増したように見えた。

「いよいよ本番といこうか」

レイは少女天使の開かれた聖域へと移動した。狙うのはすでに濡れほころんだ処女花だ。

「あ、ああ……っ！」

レイの意図を悟ったナツキが絶望の悲鳴を漏らす。

「そ、それだけはやめて！　レイ、わ、私はあなたの……っ！」

『姉なのよ』という言葉が喉まで出かけて、ナツキは慌てて口をつぐんだ。

それをこの場で言ったところでなんの役にも立たない。むしろ最悪の事態を招くだけだろう。

「フフフ。混乱しちゃって、かわいいな」

狼狽しきったナツキを見下ろしながら、レイは腰を突き出す。

姉の唾液にまみれたチェリーピンクの先端が、美麗な花びらにクチュッと触れた。

「あああっ！　だ、だめぇ！」

悪魔に支配されていても肉体は弟のモノだ。実の弟と男女の関係になるなど絶対に許されない背徳行為だ。

（だめ……弟と……玲と……させられたら……もう、立ち直れない）

罪の意識に心臓が切り裂かれる思いだが、心とは反対に子宮の疼きは大きくなりつつあった。

フェラチオで埋め込まれた背徳の種が、早くも芽を出そうとしているのかもしれない。

「いや、いやぁっ！　お願い、それだけは……それだけはイヤぁっ！」

最期の抵抗とばかり精一杯腰を振り立てる。だが必死の抵抗も、周囲から伸びた生徒たちの手で押さえつけられてしまう。

「ダメだよ、ナツキちゃん。素直にレイ様に処女を捧げるんだ」

「決定的瞬間も、ちゃんと撮影してあげるからさ」

「レイ様のオチンチンをおいしそうにしゃぶっていたくせに。いまさら良い子ぶらないでよ、この淫乱天使！」

生徒たちは口々にナツキを罵った。ナツキの天使の力が弱まったせいで、魔少年の妖気に感化されてしまったのだ。

「ああ、離して！　いやなのっ！　ああ……他のことならなんでもするから、それだけは許してぇ……っ」

「いくよ！　ナツキ！」

懇願を一切無視して、レイの勃起ペニスがズブリと膣孔を抉った。

「きゃああぁぁぁぁぁぁっ！」

身を裂く痛みと、究極の背徳感でナツキは魂が消し飛ぶほどの悲鳴を上げる。

「ホラ、先っぽが入ったよ」

女孔に亀頭部を食い込ませたペニスの合間から破瓜の鮮血が滲んでいる。

ナツキの処女が弟の男根によって破られた瞬間だった。

「う、うう……イタ……い……はあはあ……も、もうやめてぇ」

「ここまできて、やめられるもんか」

意地悪く笑って、レイが体重をかける。

「うあ……あぁ……」

ズブズブとペニスが秘肉を押し拡げながら沈み込んでくる。
（入ってくる……ああ……玲の……オチンチンが……入ってきちゃうぅ！）
背徳の絆が深まるにつれて、突っ張っていた手足から力が抜けていく。
「ほうら、これで全部入ったよ」
ズシッと腰を密着させ、ペニスを完全に根本まで埋め込んだ。
「あ、ああ……こ、こんなことって……」
いつも気の強そうなナツキの瞳に、涙の粒が浮かぶ。
ヒリつくような痛みを訴えている粘膜が、熱く硬い異物の存在をはっきり感じ取っていた。
（私……とうとう……玲と……）
それは紛れもなく愛する弟の男性器。悪魔の策略によって、ついに姉弟は男女の関係を結ばされてしまったのだ。
「天使と悪魔の合体成功だ！　完璧に繋がったじゃん」
「ロストバージン、おめでとう、ナツキちゃん」
囃し立てながらシャッターを切る生徒たち。もちろん禁断の結合部を集中的に撮りまくる。
「あ、あぅ……撮らないで……こんなとこ……撮らないで……ヒッ、ンあああぁぁぁっ！」

混乱に拍車をかけるようにレイが本格的に腰を振り始めた。
ジュブッ……グチュチュッ……ズブッ……ズチュウッ！
「ヒィンッ！　イヤイヤ、動かないでッ」
抜き差しされればイヤでも勃起の存在を意識させられる。
弟の太さや長さ、形を身体に覚え込まされてしまう。
「ああ、ナツキの中……すごく気持ちいいよ……」
姉の処女肉を味わい尽くすように、レイが腰をローリングさせる。柔肉が濃厚なスープのように掻き混ぜられ、淫靡な水音がクチュクチュと校庭に漏れ響く。
まだこなれてなくて窮屈な蜜孔は、かえって悪魔少年のペニスのサイズには丁度いい締まり具合だった。
「はあはあ。すごい、絡みついてくる。たまんないよ」
ペニスに吸いついてくる粘膜の柔らかさに陶然としながら、レイはグイグイと腰を前後に動かし始める。
「ンああ……やめて……レイ……ああぅ……は、はじめてなの……だから……ら、乱暴にしないで……っ！」
思わず懇願してしまうナツキ。まだ処女喪失のショックが消えていないナツキは、実際の痛み以上に、相手の激しい動きが恐ろしかったのだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/